

思い出の着物を日傘に

渡邊 <sup>ふくかず</sup> 福計 さん  
 (双海町上灘)



大切な思い出と一緒にタンスに眠っている着物はありませんか。愛着のある着物を、自分だけのオリジナルの日傘として再生してくれるのが渡邊福計さんです。

番傘職人の息子として育った渡邊さんは17歳で大阪へ渡り、傘作りの技術を磨きました。独立後、34歳で地元双海町へ帰郷。外国製の安価な製品の流入で日本での仕事が減り、傘職人が減少する中、傘作り一筋に歩んできました。

着物を再利用しての日傘作りを始めたのは4年前。脳内出血で左半身不随になったことがきっかけでした。「自由にならない体をどうに



▲生地を裁断する型も渡邊さんの手作りです。

◀奥さんの着物を使って、最初に作った思い出の1本。



かしないと…。」と思ったりハビリ目的で始めました。着物を使おうと思っただのは人がやっていないことをしたかったからです。最初に作ったのは新婚時代に妻が着ていた夫婦の思い出の着物です。

色とりどりの鮮やかな傘が壁一面に飾られている渡邊さんの工房。これまで約600本の日傘を着物から製作しました。着物の生地は絹でできていることが多いため、扱いが難しく、一般の傘を作るよりも技術が必要で、また裁断から縫製、仕上げまで、すべてを手作業で行うので、1日に作る手がける傘は1・2本に限られます。

注文をするお客さんの多くは女性で、大切な思い出と一緒に着物を持ち込みます。「お母さんの形見の品を傘にしてほしいと注文される方も多くいます。着物になじみのない若い世代の人も、傘なら喜んで使ってくれます。」

傘作りを通しての出会いを何よりも大切にされる渡邊さん。遠方のお客さんからお礼の電話がかかってくることもあり、人とのつながりが広がります。「傘を受け取った方の笑顔と『ありがとう』の言葉がとてもうれしい。年配のお客さんから『お互いがんばりましょう』と言ってもらって励まされることもあります。」

体をいたわりながら、奥さんと二人三脚で傘作りを続ける渡邊さんの夢は「世界に1つだけの傘を作ること。今は昔ながらの蛇の目傘作りに挑戦しています。いつか番傘屋の息子として身に付けた技術を生かして、骨組みから竹で作ってみたい。」

渡邊さんの作る日傘には、傘職人としてのこだわりと情熱、そしてそれぞれの大切な思い出が詰まっています。

日差しの強くなるこれからの季節。自分だけの鮮やかな日傘の花を咲かせませんか。

■問い合わせ 渡邊 福計さん  
 ☎ 986-10307

